

令和 2 年 6 月 8 日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K16902

研究課題名(和文) 日本中近世移行期の対外関係における連続と変容 遣明船を起点として

研究課題名(英文) Continuity and Change in the Foreign Relations of Japan in the Transitional Period between the Medieval and the Early-modern Times

研究代表者

岡本 真 (Okamoto, Makoto)

東京大学・史料編纂所・助教

研究者番号：50634036

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、国内外における史料調査により得た知見をもとに、日本中近世移行期の対外関係を検討した。これにより、日本が明代中国へ派遣した船による遣明船貿易、海禁を破って海外へ繰り出した華人を中心におこなわれた倭寇勢力による貿易、来航したポルトガル人ないしスペイン人商人による南蛮貿易、豊臣秀吉や徳川家康らから朱印状の発給を受けて渡航した船による朱印船貿易の、連続性と時代の経過について生じた変容を実証した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来の研究では、遣明船貿易、倭寇勢力による貿易、南蛮貿易、朱印船貿易は、別個に研究が深められる傾向が強かった。そして、それらのあいだにおける連続性や変容については、ある程度巨視的な観点から言及されることこそ皆無でなかったものの、実証的な研究が十分でなかった。そうした研究状況を打破し、15世紀～17世紀の日本の対外関係における連続性と変容を、史料にもとづき論証するに至った点に、本研究の学術的意義がある。また、それによって、より実態に則した形での歴史認識の手がかりを提供した点に、社会的意義が存する。

研究成果の概要(英文)：In this study, based on the the investigation of historical materials, the foreign relations of Japan in the transitional period between the medieval and the early-modern times were examined. This examination substantiated the continuity and the change between the tally trade, the trade mainly carried on by Chinese merchants, the Nanban trade and the Shuinsen trade.

研究分野：日本中近世対外関史

キーワード：日明関係 遣明船 倭寇 朱印船 南蛮貿易

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

従来の研究では、15世紀～16世紀前半に日本が明代中国へ派遣した船による遣明船貿易(勘合貿易)同貿易の途絶と前後して、海禁を破って海外へ繰り出した華人を中心におこなわれるようになった倭寇勢力による貿易、16世紀半ば～17世紀初期に来航したポルトガル人やスペイン人商人による南蛮貿易、16世紀末～17世紀初期に当時の政権から公許を得て渡航した船による朱印船貿易のうち、倭寇勢力による貿易と南蛮貿易の同質性は、中島楽章「ポルトガル人の日本初来航と東アジア海域交易」(『史淵』142、2005年)などの鉄砲伝来に関する研究をはじめ、様々な論考において言及されてきた。また、南蛮貿易と朱印船貿易の関連性も早くから指摘されてきた(加藤榮一「公儀と異国」『幕藩制国家の成立と対外関係』思文閣出版、1998年、初出1981年)。

これらに比し、遣明船貿易とそれ以外とのかかわりは、あまり指摘されてはこなかった。だが近年、東アジア海域に関する研究がめざましく進展した結果、遣明船貿易とそれ以外とのかかわりへの言及もなされるようになった。すなわち、村井章介「鉄砲伝来再考」(『日本中世世界史論』岩波書店、2013年、初出1997年)、鹿毛敏夫「戦国大名の外交と都市・流通」(思文閣出版、2006年)、伊川健二「倭寇的遣明使節」(『大航海時代の東アジア』吉川弘文館、2007年)などの近年の研究では、遣明船貿易と倭寇勢力による貿易の同質性が指摘されるに至ったのである。

こうした研究動向を踏まえると、課題と考えられる事柄がふたつあった。ひとつは、遣明船貿易とそれ以外とのかかわりについての指摘が、全体の傾向や船団単位の動向など、ある程度巨視的な観点からのものであり、個別具体的な事例による論証が不足していた点である。かつて本研究代表者は、これを指摘したうえで、堺商人日比屋一族の貿易活動を検討し、遣明船貿易から倭寇勢力による貿易や南蛮貿易への連続性を論証した(岡本真「堺商人日比屋と16世紀半ばの対外貿易」中島楽章編『南蛮・紅毛・唐人』思文閣出版、2013年)。だが、事例蓄積はまだ十分でなく、これに関するさらなる研究が必要不可欠であった。

もうひとつは、外交面における遣明船貿易とそれ以外の関連の究明である。前近代の対外関係において、外交と貿易が密接な関係にあったことは言うまでもない。それは日本の研究だけでなく、Birgit Tremml-Werner, Spain, China and Japan in Manila, 1571-1644, Amsterdam University Press, 2015など、海外の研究を見ても明らかである。遣明船貿易、倭寇勢力による貿易、南蛮貿易、朱印船貿易のすべてをひとつの視野に収め、日本の中近世移行期における対外関係の変遷の具体相を追究するには、外交面における連続性ないし変容の検討もおこなう必要があったのである。

2. 研究の目的

前項に記した研究開始当初の背景をうけて、本研究では、日本中近世移行期の対外関係の変遷過程を、16世紀前半を最後に派遣が途絶えた遣明船に関する考察を起点に検討し、そこから倭寇勢力による貿易、南蛮貿易、朱印船貿易への展開において、連続性が認められる点や変容した点について、貿易と外交の両面から実証的に追究することとした。そして、そのうえで、それぞれの貿易の特徴を把握し、当該期の対外関係において連続性が認められる点や変容した点について、その要因をさぐることを目的とした。

3. 研究の方法

本研究では、まず先行研究において示されている情報と、研究代表者がこれまでの研究活動を通じて知り得た事柄をもとに、研究対象とすべき史料を洗い出し、そのうえで必要に応じて出張調査を実施した。具体的には、平成28年度に、東京の石川武美記念図書館所蔵史料、京都の京都国立博物館寄託史料、イタリア国ローマの国立ローマ中央図書館所蔵史料、同29年度に、東京の国立公文書館所蔵史料、北海道松前町の同町所蔵史料、ポルトガル国リスボンの国立文書館および国立図書館所蔵史料、平成30年度には台湾の中央研究院歴史語言研究所所蔵史料、カンボジアの朱印船貿易関連史跡ならびに出土資料、スペイン国バルセロナのイエズス会カタルーニャ管区歴史文書館所蔵史料、令和元年度には大阪の関西大学図書館所蔵史料、京都の京都国立博物館寄託史料、滋賀の高月観音の里歴史民俗資料館寄託史料の調査を、それぞれ実施した。次に、こうした調査によって蒐集した史料と、それ以前からの研究代表者の研究活動により蓄えてきた史料とをもとに、議論を組み立て、考察をおこなった。そしてその結果を、後掲の「5. 主な発表論文等」の項に記すような、口頭発表による研究報告や学術雑誌等への論文投稿の形で公表した。なお、こうした研究の過程は必ずしも不可避なものではなく、議論を組み立てる過程で新たに必要が生じて史料調査を実施したり、研究報告をおこなった後の討論などを踏まえて議論を組み立て直したりするなどした。また、研究を進める過程で蒐集した史料のうち、史料そのものの検討が深まったものについては、その史料を翻刻して解説を付し、史料紹介の形で公表したものもある。

4. 研究成果

「2. 研究の目的」の項で挙げた目的のうち、貿易面については、京都商人や近江出身の商人の活動実態を史料からさぐり、遣明船貿易から倭寇勢力による貿易、南蛮貿易、朱印船貿易への連続性を実証した。また、それだけでなく、遣明船貿易商人のなかには、同貿易の途絶後も存続した一族と、途絶とともに活動が見られなくなる一族とがあることを見出し、両者には貿易を主

催していた政権への依存度において差異が見られることを明らかにした。また外交面については、遣明船貿易と朱印船貿易の外交面における最大の差異は、相手国の違いを除けば、使節に任じられたのが前者では五山禅僧なのに対し、後者では貿易商人だった事実であり、それが次のような差異に由来していると考えられることを指摘した。すなわち、遣明船貿易では朝貢という外交儀礼をおこなわなければ貿易が不可能であったために、日本国王から明皇帝への朝貢使節の体裁を整える必要があり、結果として、それにふさわしい学問的素養を備えた五山禅僧が起用された。つまり、遣明船貿易において、少なくとも形式的には、外交が前提条件で、貿易はそれに付随しておこなわれたのである。これに対し朱印船貿易では、貿易のための朱印船の往来という土台があって、それに便乗して外交が実施された。その結果、朱印船貿易においては、外交文書の作成においてこそ、はじめ禅僧が、のちには儒者が担当して、相応の威儀が整えられたものの、使節は遣明船貿易の際のような体裁を整えるには至らず、外交文書は商人に託され、彼らはみずから使節となった。つまり、貿易が前提条件で、外交は付随しておこなわれたにすぎなかったのである。このような遣明船貿易と朱印船貿易における、貿易と外交の位置づけの逆転現象は、外交の性格に変質をもたらしたと考えられる。そしてその原因は、もともと表裏一体だった外交と貿易のうち、前者は遣明船の終焉後、倭寇勢力による貿易や南蛮貿易の盛行の際にいったん途絶えたのに対し、後者は遣明船貿易から朱印船貿易に至るまで、連続していた点にあった。こうした事柄を明らかにするに至ったのである。

如上の成果は、近年、進展の著しい東アジア海域に関する研究に、実証面からの裏打ちを与えるとともに、日本史研究のなかでは、中世と近世、もしくは戦国期、織豊期、江戸期のように、時代区分によって検討が分断されがちな 16 世紀～17 世紀初頭に関する研究において、それらの連続性を明らかにしただけでなく、通時代的な観点から見ることにより意識し得る変容を見出すことに成功したと言える。また、こうした学術成果は、国際学会においても公表してきたため、今後、日本国内にとどまらず、広く参照されていくことが期待される。

なお、本研究遂行の過程で、原本が今日所在不明で、写本の形でしか伝わっていない外交文書について、内容の異なる複数の外交文書写本が伝わっているにもかかわらず、しばしば写本同士の間で綿密な比較対校を経ないままに、漠然と入手の容易なものを用いている研究が少なくないことに気づかされた。これについては、本研究の遂行により得られた知見を生かして、今後新たに研究をすすめていくことを構想している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 古川祐貴、岡本真、松方冬子	4. 巻 29
2. 論文標題 日本 朝鮮・西欧・台湾鄭氏往復外交文書表 16世紀末～19世紀初頭における	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東京大学史料編纂所紀要	6. 最初と最後の頁 15～35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 岡本真	4. 巻 8
2. 論文標題 フロイス『日本史』の史料的价值 天文～永禄年間の事例にみる	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 多元文化	6. 最初と最後の頁 33～42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 岡本真、伊川健二	4. 巻 8
2. 論文標題 東洋文庫所蔵フロイス『日本史』写本について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 多元文化	6. 最初と最後の頁 43～46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 岡本真、須田牧子	4. 巻 27
2. 論文標題 天龍寺妙智院所蔵『入明略記』	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 東京大学史料編纂所研究紀要	6. 最初と最後の頁 118～131
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 岡本真	4. 巻 691
2. 論文標題 戦国期の京都商人と対外貿易 遣明船から南蛮船・朱印船へ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本史研究	6. 最初と最後の頁 46～67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡本真, 須田牧子	4. 巻 30
2. 論文標題 天龍寺妙智院所蔵『大明譜』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東京大学史料編纂所研究紀要	6. 最初と最後の頁 196～210
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岡本真	4. 巻 987
2. 論文標題 ポルトガル国立トルレ・ド・トンボ文書館 現代の「文書の塔」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 歴史学研究	6. 最初と最後の頁 38～41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件(うち招待講演 2件/うち国際学会 3件)

1. 発表者名 Makoto Okamoto
2. 発表標題 The merchants of Kyoto and foreign trade from the 16th to the early 17th century: The shift from diplomatic ships sent to Ming China to Vermillion Seal ships
3. 学会等名 The Asian Studies Conference Japan (ASCJ) 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岡本真
2. 発表標題 フロイス『日本史』の史料的価値 天文-永禄年間の事例を中心に
3. 学会等名 早稲田大学多元文化学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Makoto Okamoto
2. 発表標題 The flexibility of the tally system between Muromachi Japan and Ming China
3. 学会等名 15th International Conference of the European Association for Japanese Studies (EAJS) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 岡本真
2. 発表標題 弘治年間の遣明船の歴史的位罫
3. 学会等名 名古屋中世史研究会10月例会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 岡本真
2. 発表標題 戦国期の京都商人と対外貿易
3. 学会等名 海域アジア研究史合宿
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Makoto Okamoto
2. 発表標題 Transformation of diplomacy and trade in Japan during the 16-17th century
3. 学会等名 Asian Studies Conference Japan (ASCJ) 2016 (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 岡本真
2. 発表標題 戦国期の京都商人と貿易 遣明船から南蛮船・朱印船へ
3. 学会等名 日本史研究会中世史部会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岡本真
2. 発表標題 戦国期の京都商人と対外貿易 遣明船から南蛮船・朱印船へ
3. 学会等名 日本史研究会中世史・近世史合同部会 (悪天候のため中止となった日本史研究会大会報告の代替) (招待講演)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考